

武藏野日曜集会

聖意体現（二）

——ヨハネ伝第4章27～45節——

小池辰雄

1994年6月12日

わが食物は聖意体現 永遠の生命 キリスト道 全存在で体受 聖意に従うことが楽しい キリストに圧倒されながら生きる

【ヨハネ4・27～45】

²⁷時に弟子たち帰りきたりて、女と語り給うを怪しみたれど、何を求め給うか、何故かれと語り給うかと問うもの誰もなし。²⁸ここに女その水瓶を遺しあき、町にゆきて人々にいう。²⁹「來りて見よ、わが為しし事をことごとく我に告げし人を。この人、或はキリストならんか」³⁰人々町を出でてイエスの許にゆく。³¹この間に弟子たち請いて言う『ラビ、食し給え』³²イエス言いたもう『我には汝らの知らぬ我が食する食物あり』³³弟子たち互にいう『たれか食する物を持ち來りしか』³⁴イエス言い給う『われを遣し給える者の御意を行い、その御業をなし遂ぐるは、是わが食物なり。³⁵なんじら收穫時かりいれどきの来るには、なお四月ありと言わすや。我なんじらに告ぐ、目をあげて畠を見よ、はや黄きばみて收穫時きはになれり。³⁶刈る者は、価まを受けて永遠の生命の実を集む。播く者と刈る者とともに喜ばん為なり。³⁷俚諺ことわざに彼は播き、此は刈るといふは、斯こゝにおいて真なり。³⁸我なんじらを遣して労せざりしものを刈らしむ。他の人々さきに労し、汝らはその労を收むるなり』

³⁹此の町の多くのサマリヤ人、女の『わが為しし事をことごとく告げし』と証したる言によりてイエスを信じたり。⁴⁰斯てサマリヤ人、御許にきたりて此の町に留らんことを請いたれば、此處に一日とどまり給う。⁴¹御言によりて猶もおおくの人、信じたり。⁴²かくて女に言う『今われらの信ずるは汝のかたる言によるにあらず、親しく聴きて、これは真に世の救主なりと知りたる故なり』

⁴³一日の後イエスここを去りてガリラヤに往き給う。⁴⁴イエス自ら証して預言者は己さとが郷にて尊ばるる事なしと言ひ給えり。⁴⁵斯てガリラヤに往き給えば、ガリラヤ人これを迎えたり。前に彼らも祭に上り、その祭の時にエルサレムにて行い給いし事を見たる故なり。



● わが食物は聖意体現

²⁷ 時に弟子たち帰りたりて、女と語り給うを怪しみたれど、何を求め給うか、何故かれと語り給うかと問うもの誰もなし。

²⁸ ここに女その水瓶を遺しおき、町にゆきて人々にいう、

「私に飲ませてくれ。私が分かれば、あなたには靈の水をあげるのだが」と言つたということが前に書いてある。魂の本当の水、これは聖靈のことです。

²⁹ 「來りて見よ、わが為しし事をことごとく我に告げし人を。この人、或はキリストならんか』

非常にドラマチックなところです。

「みな来てごらんなさい。私のことを、何も言わないのに、みな知つている。これはキリストではないか」

と。キリストはちゃんと、その人の本質や過去が見えてしまうんだね、大変なひとだな。『夫がいるか』

と聞いたら、

「ありません」

と答えたところ、

「五人いたのだけれども……」

なんて、キリストに見られていた。「キリスト」はヘブライ語では「メシヤ」です。「マーシアッハ」という。ギリシア語では「キリスト」「油注がれたる者」という意味です。聖靈を注がれた者。だから、私たちは「キリスト者」というのは、聖靈を注がれていなければ、本当はキリスト者とは言えないわけです。ところが、聖靈を受けてないキリスト者がたくさんいるわけだ。

³⁰ 人々町を出でてイエスの許にゆく。³¹ この間に弟子たち請いて言う『ラビ、食し給え』³² イエス言いたもう『我には汝らの知らぬ我が食する食物あり』

「あなた方が知らない食べ物がある」という。

³³ 弟子たち互にいう『たれか食する物を持ち来りしか』³⁴ イエス言い給う『われを遣し給える者の御意を行い、その御業をなし遂ぐるは、是わが食物なり。

こんな答をするひとは他にいない。どんな食物かと思つたら、神さまの聖意を体現することだという。御意を行うこと、これが食物だと。神さまの御意を行うためには、聖靈が来なければ御意は行えない。この聖靈が食物です。靈の食物です。

また、聖靈を水にも例え、火にも例えた。パウロも

「聖靈を消すな」

と言つてはいる。生命の水です。我々の肉体にとつて一番大事なのは空氣と水です。空氣と



水が無かつたら、誰も一時間と生きてられない。空気が無かつたら窒息してしまう。気といふものは大事なものだ。藤田東湖の詩に

「天地正^{せいだい}大^{だい}の氣」

という言葉がある。肉体にはこの空気がなければダメ、魂の世界には靈気がなければダメです。我々は空気と靈気がなければ本当は生きてられない。靈気の力は凄いね、中国人に氣でもつて人を倒すのがある。

「われを遣し給える者の御意を行い、その御業をなし遂ぐるは、是わが食物なり。」

という。これは人を救う。人を助けたり救つたりする。そういう業です。それにはこの靈気がいる。それが自分の食物だという。

「御業をなし遂げる根源となるものが我が食物だ」ということです。

「御業をなし遂げる根源」

とは靈氣です、聖靈です。それが本当の食物だという。

聖靈に満たされると、御靈の力で、ご飯を食べなくともいいような氣持になつてしまふ。水だけ飲んでいればいい。断食は我慢ではない。食物を絶つことは、靈氣を食べることです。靈氣を食べれば、聖靈をうちに宿せば、水だけ飲んでいれば大丈夫です。

●永遠の生命

³⁵なんじら^{かりいれどき}収穫時の来るには、なお四月ありと言わずや。我なんじらに告ぐ、目をあげて烟を見よ、はや黄^{きば}みて収穫時になれり。³⁶刈る者は、価を受けて永遠の生命の実を集む。播く者と刈る者とともに喜ばん為なり。³⁷俾諺^{ことわざ}に彼は播き、此は刈るといえるは、斯において真なり。³⁸我なんじらを遣して労せざりしものを刈らしむ。他の人々さきに労し、汝らはその労を收むるなり』妙なことが書いてあるね。ヨハネ伝6・38に、

³⁸夫^{それ}わが天より降りしは我が意^{いのう}をなさん為にあらず、我を遣し給いし者の御意^{みいのう}をなさん為なり。

キリストは

「私は何も自分ではできない。ただ神さまの御意に従っているだけだと仰つた。

³⁹我を遣し給いし者の御意は、すべて我に賜いし者を、我その一つをも失はずして終の日に甦えらする是なり。⁴⁰わが父の御意は、すべて子を見て信ずる者の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれを甦えらすべし』（ヨハネ



とある。

「永遠の生命」

というのは、もちろん聖靈がなければ永遠の生命ではない。死はない生命、というものは、聖靈が来なければ不死の生命にならない。我々の肉体は亡びます。けれども、この肉体の奥に靈的な生命が宿っているから、これは亡びない。肉体が亡びても、今度は靈体をいただいて次の世で生きていく。そういう意味で、我々は死がないわけです。死を乗り越える。

「陰府よみのみの力、死の勝ちはいざこにあるか」

という、パウロの言葉がある。

「²²然れど今は罪より解放されて神の僕となりたれば、潔ヨハナにいたる実を得たり、その極はては永遠の生命なり。²³それ罪の払う価は死なり、然れど神の賜物は我らの主キリスト・イエスにありて受くる永遠の生命なり。」（ロマ6・22～23）

と。

●キリスト道

私は、「キリスト教」という言い方は嫌いになってしまった。決して、キリスト教とは言わない。「キリスト道」です。道なんです。

「我は道なり、真理なり、生命なり」

とキリストが言われた。キリスト自身が「道」と言われた。キリスト自身が神さまからの道であり、神さまへの道である。そして、この道に即して我々一人一人が歩くところが路だ。正に

「道路、

なんだ。道はキリストで、我々はそれに即するところの路でなければならない。この路は道をもとにしてなければダメです。それが我々の福音的な歩きかたの道路ということです。この道路は一人一人みな違う。他人の歩いたところをまた歩く必要はひとつもない。一人一人は誰でもが特別な人生道路、人生航路を歩かせられている。

「宗教」というのは、教えではない——あの教の字は本当はいかん——力をもつてないものは人を生かすことができない。

「キリスト教はキリストの教えである」

なんて言つてゐるうちはダメです。キリストは力だ、生命だ、光だ。聖書はそういうもの凄い次元の本です、決して意味の本ではない。

「この意味はどうだ」

なんて、詮索しているようなのは、「聖書研究会」なんていうものは大間違いだ。

「原語が分かればなお聖書が分かる」

と思つてゐる。そうではない。ギリシア語やヘブライ語の奥の神の根源語の響きが聞こえ



てこなければダメなんです。

●全存在で体受

³⁹此の町の多くのサマリヤ人、女の『わが為しし事をことごとく告げし』と証したる言によりてイエスを信じたり。

この「信する」という言葉がまた観念的になるから困る。

「受けとつた」

と言つた方がいい。身体で受けとる、体受する。全存在で受けとることを体受という。キリストを全存在で受けとらなくては。全的ということは、それを全部、分解しないで受けとることです。しかも、その内容は完成した内容ではない。無限なんです。

無限的なものを受けとつていく。ある完成したものはもうそれでお終いです。完成はダメだ、未完成がいい。シユーベルトの「未完成交響曲」がいい。とにかく、「これでお終い」というものはダメです。私は完全性という言葉は嫌いだ、無限性がいい。キリストの言葉に、

「父の全きがごとく全かれ」

という凄い言葉がある。あの言葉は躊躇になる。キリストは

「神さまの全きが如く全かれ」

と仰つたけれども、我々はできつこない。キリストの言葉に躊躇している。あの「全き」というものは、むしろ私に言わせれば無限性なんです。「無限無量」ということです。

「無」

という字は「ない」ということではない。字の成り立ちは

「⁴⁰ 天空の下の廿廿の林」

ということ。四十の林の木の数は数えられるか、数えられない、無数である。だから、「無」は無数を表している。

何でも全的に受けとることの素晴らしいのはゲーテという詩人です。しかし、大詩人ゲーテも本当はキリストを受けとつていなかつた。惜しい。むしろ青年時代のゲーテの方がもつと福音を受けとつていた。ある女性の導きが非常にゲーテに影響した。

⁴⁰斯てサマリヤ人、御許にきたりて此の町に留らんことを請いたれば、此処に二日とどまり給う。⁴¹御言によりて猶もおおくの人、信じたり。⁴²かくて女に言う『今われらの信するは汝のかたる言によるにあらず、親しく聴きて、これは真に世の救主なりと知りたる故なり』

「あなたは本当に救世主だ。それが分かりました。普通の人とはケタが違う」と。

⁴³二日の後イエスここを去りてガリラヤに往き給う。⁴⁴イエス自ら証して預言者は己さとが郷にて尊ばるる事なしと言い給えり。⁴⁵斯てガリラヤに往き給えば、ガリラヤ人これを迎えたり。前に彼らも祭に上り、その祭の時にエルサ



レムにて行い給いし事を見たる故なり。

「いや大変なひとだ」

「いうことが初めて分かつたわけだ。

「預言者は己が郷にて尊ばるる事なし」

という。身近な人たちがその本質が分からぬ。遠くの人が反つて分かる。これは妙なものだ。

●聖意に従うことが楽しい

詩篇27篇は非常に慰め深い詩篇です。

「¹⁰わが父母われをすつるともエホバわれを迎えたまわん。¹¹エホバよなんじの途みちをわれにおしえ、わが仇のゆえに我をたらかなる途にみちびきたまえ。¹²いつわりの証をなすもの暴言あらひを吐くもの我にさからいて起こりたてり。願くはわれを仇にわたしてその心のままに為さしめたもうなけれ。¹³われもしエホバの恩寵いふくしみをいけるものの地くににて見るの待たのみながらましかば奈何いかにぞや。¹⁴エホバを俟望まちめ、雄々しかれ、汝のこころを堅かたうせよ、必ずやエホバをまちのぞめ。」（詩篇27・10～14）

「まちのぞめ」という言葉は、質的には「信頼せよ」ということです。時間的に「待ち望め」というのは、質的には「現に信頼せよ」ということです。ドイツ語では「ベフエーレン」という字が使つてある。詩篇27篇は詩篇150篇の中の非常に大事なもの一つです。「幕屋」のこととも書いてある。

「⁵われ靈魂たましひをなんじの手にゆだぬ。エホバまことの神よ、なんじはわれを贖みていたまえり。」（詩篇31・5）

とある。この

「われ靈魂をなんじの手にゆだぬ」

という言葉が、キリストが十字架の上で最後に言われた言葉なんです。

詩篇32篇も大事な詩篇です。それから、33篇も。

「⁶もろもろの天はエホバのみことばによりて成り、てんの万軍はエホバの口の氣いきによりてつくられたり。」（詩篇33・6）

と、凄いことが書いてある。

「⁸わが神よわれは聖意みこころにしたがうこと樂しむ。なんじの法はわが心のうちにあると。」（詩篇40・8）

「聖意に従うことが楽しい」

という。こうなつたら本ものです。とにかく、聖書は決して考えられた言葉でもなければ、こつちからただ願つた言葉でもない。上から來てゐる言葉です。だから、力があるし、権



威がある。詩篇のあちらこちらを読んで、大事な所にはサイドラインを引いておきなさいよ。私は創世記から黙示録まで全部、大事なところにラインが引っ張つてある。全巻読んでいる。

●キリストに圧倒されながら生きる

ヨハネはパウロと違つて、キリストの中にグッと自分を投げ入れて、キリストの生命をそのまま頂いて生きていたような弟子です。だから、十字架のキリストも最後にやはりヨハネに語りかけている。

とにかく、キリストという驚くべき靈的実在に圧倒されながら生きるに如くはなしということです。どんな事があつても大丈夫です。運命・環境の如何にかかわらず、いろいろな事いでつくわせば逆に力がくる。力のない宗教はダメです。キリスト教ではない。キリスト力なんだ。キリスト道、キリスト力です。教えだと思うから、おかしなことになる。キリスト教という言い方はダメだ、せめてもキリスト道と言わなければ。

「我は道なり。みんな、しつかり歩け」というわけだ。「信ぜよ」ではない。

「歩けよ」

なんです。

私は無教会の時に散々、

「信仰、信仰」

と言われてきた。

「信仰のみの信仰」

とか、

「行いは問題にしなくていいから、信仰しろ」

とか、

「信仰がなければダメだ」

とか。「信仰」という言葉にすっかり飽き飽きした。「言ひには「信仰」と言う。今の私は、

「私は信仰なんかありません。在るのはキリストだけです。こっち側の信仰が何にならぬか」

と言つてやる。私の『無者キリスト』や『無の神学』に驚いたのは、そういう気合で書いているからです。だから、アメリカ人がびっくりしてしまつた。それくらい、一般の神学者は宗教書を頭で書いている。

もちろん、アッシジのフランチエスコとか、タウラーとか、エックハルトとか、ああいう連中はみなもちろん靈的です。マルチン・ルターももちろん靈的です。ルターはかなり理屈が多いけれども、とにかく宗教改革者だから大変なものです。ゾイゼというのもなかなか凄い。『イミテイション・オブ・クリエイター』（キリストに倣いて）を書いたトマス・ア・



ケンピスも凄い。本の名前の「イミテイション」という言葉は嫌いだけれども。「イミテイション」ではないんだ。

とにかく、あなた方はみなそれぞれ、この福音を受けたら使命がありますから、本ものを伝えてください。もつたいないですよ、この福音は。自分でしまっていたら腐つてしまふよ、人に流していかないと。泉のごとく、滾々と湧きいでて流れていなければ。

あなた方はご自分で聖書をじっくりお読みください。聖書は聖書自身で註解していくばいいので、何も参考書なんかは要らない。聖書はただ読むのではなくて、読み入る、読みながら聖書の中に自分を入れなければダメです、読入しなければ。

「分かりました」

「どうような表現をしないように。「分かりました」ではない、

「受けとりました」

と言う。

「分かる、分からない」

という世界ではない。

「受けとつたか、受けとらないか。その中に入つたか、入らないか」

ということ。体受、読入です。要するに、聖書の次元と一つになるということです。

サマリヤの女の所を読んだら、自分がサマリヤの女になつてキリストに救われたらしい。自分がマグダラのマリヤになつてキリストに全身でぶつかつたらしい。ナルドの香油の壺を割つて、

「もうこの壺は使わない」

と言つて全部キリストに注いだ、あの女の愛にキリストは感激した。

「この女のしたことは福音の伝えられる所いすこにも語り伝えられる」とキリストは言つた。

すべてが全身的でなければダメです。部分的なものはダメです。

